

ハイブリッド証券取引所

11月1日、東京証券取引所で前代未聞のアクシデントが発生した。株式等の証券取引システムが朝から稼働せず、3時間に亘って全く取引ができなかったのである。

ニューヨーク証券取引所に次ぐ世界2番目の規模を誇る東京証券取引所がストップしたのだから、背筋が寒くなったのはわれわれ業界の者だけではなかった。原因はシステム更改に伴うプログラムミスとのことである。ミスを起こしたシステム会社、それをチェックできなかった取引所の責任は重い。

一方、未体験アクシデントの中で、投資家からの膨大な注文や問い合わせに対応し、大きな混乱をもたらさなかった証券業者の人手による現場力は、評価されてよいのではないだろうか。人間の現場力が、ダウンしたシステムをカバーして午後の取引再開後1時間半で、平常時のほぼ8割に当たる取引を執行した。

東京証券取引所は再発防止策を公表したが、基本はシステムの改善ということに尽きるようだ。しかし、今回のアクシデントから学ぶべき対策として、システムと人手の融合＝ハイブリッド化も検討されるべきだと考える。そもそも証券取引の成り立ちは、定められた場所に多くの証券業者が集まり、競り市方式で、取引を成立させることであった。

これを立会場取引という。近年、コンピュータ、情報通信技術の進歩と、取引の低コスト化、迅速化の要請から世界の主要な取引所は電子取引に移行してきている。東京証券取引所も1999年5月から全面的に電子取引に移行した。

ところで、ニューヨーク証券取引所は未だに立会場取引を続けている。「伝統的なこの仕組みこそが、安全で高い流動性と公正な市場の源である」とする哲学による。もちろん、コストダウンなどの要請はあるわけで、これに対して「ハイブリッド市場構想」を提案している。従来 of 立会場取引と電子取引による自動執行とを組み合わせたものである。

昨年8月に構想を発表して以来、各関係者の意見を取り入れながら来年春の移行を目指している。日本以上にコンピュータ社会であるアメリカで、きわめて人間くさい立会場を守ろうとする姿勢に、証券取引の本質の一端を見る気がする。一部のミスで取引が全面的にストップする電子取引リスクに対応するだけでなく、昨今の法律の抜け穴をつく株買占めや、相場操縦に近いような無機質な取引に対する牽制としても、全てコンピュータ任せにせず生の人間の知恵や感覚が集まる場の復活を検討する余地があるのではないだろうか。